

- [朝日新聞デジタル](#)

犠牲になった一家4人の鉛筆画 永遠にと思い込めた「お巡りさん」

増山祐史 2022年12月29日 9時00分



宮澤節子さん宅に飾ら

れている鉛筆画。みきおさん長男礼君長女にいなさん妻泰子さん=2022年11月24日午後4時29分さい
[たま市浦和区増山祐史撮影](#)



仏壇が置かれた和室の壁に、1枚の鉛筆画が飾られている。あどけなさが残る2人の子どもの両隣に、穏やかな表情の両親が並ぶ。

「表情もみんなそっくり」

91歳になった宮澤節子さんは、そう言って顔をほころばせた。

世田谷一家殺人事件からまもなく 22 年。遺族の自宅に飾られた犠牲者 4 人の鉛筆画の作者を追ったところ、今も現役の警察官だったことがわかりました。何故、どんな思いで描いたのか。本人に聞きました。

絵の中の 4 人は、節子さんの息子の宮澤みきおさんと妻泰子さん、長女にいなさん、長男礼君。22 年前の年末、東京都世田谷区の自宅で何者かに殺害された。

絵を飾ったのは、節子さんの夫の良行さんだった。10 年前に 84 歳で死去した良行さんは生前、「4 人に毎日会いたい」と言って一人ひとりの遺影を同じ和室に飾っていた。「この絵もそういう意味があったのかもね」と節子さんは話す。

節子さんは良行さんから、この絵を描いたのは「お巡りさん」とだけ聞いていた。

その人は今、警視庁の町田警察署にいる。

2000 年 12 月 31 日、青木隆行さん（51）は事件の発生をテレビのニュースで知った。当時、現場を管轄する成城署の交通課員で、翌日の 01 年元旦に事件の特別捜査本部に加わった。

先輩刑事とペアを組み、聞き込みや遺留品の捜査にあたった。刑事の経験はなかったが、靴をすり減らしながら目撃情報を集めた。

当時は常に、1 枚の写真を手帳に挟んで持ち歩いていた。コデマリを背景にして石段に座る 4 人の家族写真。事件前年の春、一家の自宅近くの公園で撮影されたものだった。

01 年冬、青木さんはこの写真をモチーフにした鉛筆画を描くことにした。

子どものころから絵を描くのは好きだった。高校は美術部で、美大を目指そうとしたこともある。年明けにある署員の作品展に出品する題材に、この写真に写る一家を選んだ。どんな人がこの悲惨な事件で命を奪われたのか。捜査本部に加わっていない同僚にも知ってもらいたかったからだ。

当時、青木さんには 1 歳になったばかりの娘がいた。「子どもたちの恐怖心はどれほどのものだったか」。にいなさんや礼君の表情を描こうとすると、幼子を持つ親として胸が締め付けられた

。

タイトルに込めた犠牲者への思い

少しでも写真に写る 4 人の表情に近づけようと、何度も何度も描き直した。

完成した絵には、「Four—ever」とタイトルを付けた。4 人を永遠に忘れない——。そんな思いを込めた。

作品展の後、絵は被害者担当の刑事を通じて良行さんに渡った。「喜んでいました」と伝えられた。

6 年ほど捜査本部に詰めた後に別の警察署に異動してからは、交通捜査の道を歩んでいる。町田署にいる今も、交通違反を取り締まりながら「どこかに 4 人を殺害した犯人がいるのではないか」という思いを持ち続けている。

「ご遺族の時間は止まっている」

自分が描いた絵が、20年以上たった今も飾られていることは知らなかった。「そんなに大切にしてもらっていたとは」と驚きつつ、「ご遺族の中ではこのときの4人のまま時間は止まっているということ」とも思う。事件はいまも解決していない。

絵が描かれた経緯と事件当時29歳だった「お巡りさん」のことを記者が伝えると、節子さんは「若い刑事さんが描いてくれていたんですね」と少し驚きながら、改めて絵を見つめて「やっぱり、よく描けてます」と言葉をつないだ。(増山祐史)

世田谷一家殺人事件とは

世田谷一家殺人事件 2000年12月31日午前、世田谷区上祖師谷3丁目の宮澤みきおさん(当時44)方で、宮澤さん、妻泰子さん(同41)、長女にいなさん(同8)、長男礼君(同6)の一家4人全員が殺害されているのを親族が見つけた。犯行は前日の30日深夜以降とみられ、現場には犯人の血痕や指紋、トレーナーなどが多数残されていた。警視庁は「重要未解決事件」として、これまでに延べ29万人以上の捜査員を投入し容疑者を追っているが、未解決のままとなっている。